



TITLE:

日本經濟史の特性

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 日本經濟史の特性. 經濟論叢 1923, 16(6): 911-921

ISSUE DATE:

1923-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128037>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷六十第

行發日一月六年二十正大

論叢

賣上税の本質及長所 法學博士 神戸 正雄

日本經濟史の特性 法學士 本庄榮治郎

サン・シ
モン派の社會改造哲學及び連帶思想 文學博士 米田庄太郎

價値の類型と個性 法學士 恒藤 恭

時論

支那の産業に對する投資 法學博士 戸田 海市

税法の新改正を論ず 法學博士 小川郷太郎

說苑

婚姻年齡の統計的研究 經濟學士 岡崎 文規

雜錄

東京市の水面人口及所帶 法學博士 財部 靜治

炭鑛労働者の生計狀態 法學博士 河田 嗣郎

附錄

本誌第十六卷總目錄

日本經濟史の特性

本庄榮治郎

一

茲に所謂日本經濟史の特性とは、日本經濟史の觀念や學問上の性質を云ふのではなく、我國に於ける經濟發達の特徴を指すものであつて、詳言すれば、過去より現在に至るまでの、我國の經濟的發達の跡には、他國のそれと異つた何等かの特質が、あるかどうかいふことを究めむとするものである。

二

論者或は曰く「元來歴史は個々別々のものであつて、世界の各國は皆異つた歴史を有することは余の辯明を待たざる所である、併しながら世界文明の進歩は一と筋であつて、人類發達の沿革は皆同一の軌道を辿り、同一の方向に嚮つて進みつゝあるのである。故に國々個々の歴史は其の文明の遲速、發達の程度に隨て、各々異なりたる現象を顯はし、又其の複雑したる内外關係の差違に依つて、多少の異同なきにあらざるも、要する所、世界の歴史は悉く同じ事を繰返へしつゝ、

あるのである。先進國たる甲國の經驗した事は、後進國たる乙國の藍本となり、乙國の閱歷した事は、丙國の先例となり、丙國の足跡は丁國の追隨する所となるが如きは、畢竟、皆進歩發達の原則に支配されて居るのである」と説き「日本の歴史は世界發達史の一部分と見ざる可らず」との趣旨を明かにして居られる。¹⁾

これは一應尤なことである。而してこの筆法から云へば、各國經濟の發達も勿論同一の軌道を辿り、同一の方向に嚮つて進みつゝあるものであるといひ得べく、かの經濟發達階段説の如きものが成り立つ所以は、各國の經濟の發達が、大體に於て同様の傾向を有するものなることは云はすとも明かなることであらう。我國について考へて見ても、我國の文明は、支那の文明を受け、朝鮮の文物を輸入し、又は此等を通じて、印度方面の文明に接し、最近また歐米と交際してその文化を受け、此等を咀嚼して築き上げられたものであつて、外國交通との關係が頗る重大なる要素をなせることは否定する能はざる所である。故に我國の經濟の發達を考ふる場合にも、世界の經濟發達の有様を考へなければならぬことは勿論である。特に近時における如き、世界交通の發達せる場合には、相互倚依の關係は一層密接なるものがあるといはなければならぬ。

三

然しながら一面から考ふれば、西洋には西洋の風があり、東洋には東洋の風がある。同じ西洋

1) 瀧本博士、經濟一家言 411頁

の内でも、英國と大陸諸國とは亦自ら趣きを異にし、大陸中にても佛國と獨逸とは事情を異にする所が多く、同じ人種の國なればとて、英國經濟史と米國經濟史とは、同一の發達を示せるものとはいへぬ。況や日本經濟史と西洋經濟史との關係に於ておや。蓋、各國の地理氣候とか、制度とか習慣とかの所謂經濟發達の條件は必ずしも同一ではない。或る國に盛に行はれたる事柄なればとて、必ずしもそれが他の國に於て同様に盛に行はるゝものとは限らない。又彼我交通の關係が時には密接であつても、他の時には疎略になつたこともある。何れの國も全然その特別の性質を没却して、一般普遍的のものと化することは決して容易のことではない。爰に於て乎、その發達の大勢は外觀上、大體同様の徑路を採るにしても、其内容に立ち入つて考ふれば、種々なる特殊の原因事情の存するものである。而もその特殊の事情が其國にとつては頗る重要な構成部分を成す場合も少くない。かゝる場合に於ては、その特殊の事情を閑却することは決して穩當ではない。孤立的に考ふことはもとより不可であるが、さればとて各國各種の特徴を閑却すること亦不可である。世界に於ける發達の大勢と、我國における特殊の發達とは、両々相譲らざる重要さを有するものであつて、兩者を適當に評價することが必要である。余が茲に日本經濟史の特性として論ずる處のものは、以上の意味に於ての我國經濟生活の特徴を指すものであつて、經濟發達の根本的傾向が普遍的であることを否認するものではない。

四

日本經濟史の特性については、種々なる方面より觀察し、又種々なる程度に於て之を論じ得るものであるが、宜しく日本經濟史の全體を蔽ふに足るべき適當なる觀察點を定めて、之を研究することが極めて必要である。若し然らずして個々別々の事柄を何等の秩序もなく列擧して一々比較するに於ては、それは無方針の譏りを免れざるのみならず、重要なるものを逸して、些事に捉へられ、輕重の度を異にせるものを同列に並べ、或はある觀察點よりすれば同一性質に屬するものを他の性質のものと並列する等の缺陷を生ずるからである。然らばその觀察點は如何にすべきかといふに、それは勿論人によつて種々の見解もあることゝ考へるが、余は次の三點から考察することが最も適當であると信ずる。その三點といふのは、第一には經濟の主體、第二には經濟の素質、第三には經濟の様式が是れである。

五

第一の經濟の主體といふのは、即ち經濟を營む國民のことであつて、この方面について、外國の歴史と著しく異なる特性は、經濟主體の連續性といふことは是れである。内田博士は國史の特性として連綿性コンチニニチなるものを挙げ、第一に國體の連綿性、民族の連綿性、及び精神的文化の連綿性の三者を數へられて居るが、余の所謂經濟主體の連續性はこの第二の民族の連綿性に當る。即ち外

國の歴史に於ては、或る時期に於て從來の民族が衰亡して他の新しき民族が之に代り、國民の主なる要素となつた事例を見るが、我國に於ては、之に反して、國初以來同一の民族が日本の社會に於て引續き主なる位置を占めて今日に及んで居る。もとより日本民族は單純なる成分より成れるものではなく、其根源に溯り、古來の歴史について考へて見れば、種々なる民族的要素が結び付いて出來上り、其後と雖、他の民族的要素の加はりしことは明かであるが、常に之を同化し吸収して、總て區別なき一のものとして、今日に至れるものであつて、かの原住民族や歸化人は、最早決して蝦夷として、土蜘蛛國標として存在せず、歸化人の子孫も、歸化人として判然區別すべきものではなく、何れも大和民族と融合し同化したのであつて、國民の中樞となり發展の主勢力となれるものは、常に大和民族そのものであつた。されば日本經濟史全體として考へる場合にはある時期までは甲民族の經濟史、或時期から以後は、乙民族の經濟史といふが如きことなく、日本經濟史は常に大和民族の經濟史として、その連續性を保有し前後を一貫せるものである。

六

次に經濟の素質の方面より觀たる特徴とは、我國の經濟的發展なるものが我國獨自の力にて行はれしものなりや否やの問題であつて、この點については、既に述べし如く我國の文明は支那朝鮮の文明を受け或は印度方面の文化に浴し、最近また歐米の方面よりも文物を輸入して築き上げ

られしものであつて、若し外國文明の刺戟無かりし場合には、我國は果して今日の狀況にまで進み得しや否やは大なる疑問なりと考へらるゝ迄に、その影響は甚しきものがあつた。³⁾ 上古における手工業の發達が歸化人による所多く、斑田收授の法が唐制から受け入れた所のものであり、佛教の傳來によつて、建築彫刻工藝等の發達を見しのみならず、鑛業も交通機關も商業取引も促進せられ、一般經濟上に非常なる影響を與へしことは言ふ迄もなく、其他個々の事例を引用するに遑なき次第であるが、大體に於て奈良平安朝時代に於ては隋唐の文化を採取し、經濟上のみならず諸般の方面に亘つて支那と趣を同うするに至り、鎌倉以後多少日本特有の風を生じ、徳川時代に至つては、日本の國民文化は一通り成熟の域に達したものであるが、⁴⁾ 維新以後西洋との交通が盛んとなるに及び、茲に西洋文化の強き影響を受けて經濟上大なる發達をなし、歐米模倣の産業は固有の産業に比すべからざる發展を遂ぐるに至つたものである。⁵⁾

かくて經濟上のみならず、我國一般の文化が、外國交通の刺戟による所多きは何人も異論を挾む餘地なき所であるが、これが爲めに我國の歴史若くは經濟史は模倣の歴史なりと考ふるは必ずしも正當ではない。蓋支那や印度の模倣と考へられて居ることでも、よく吟味して見れば彼の國の制度其儘の模倣ではなく、我國特別の事情を參酌されて居ることが少くないのであつて、その本國に於ては見ることの出來ぬ特別な趣を具へて我國に存して居ることは、單に模倣のみに終

3) 辻博士。海外交通史話472頁以下。日本文明の性質について参照

4) 河田岡本眞氏共著。日本の經濟と佛教参照

5) 内田博士。前掲書。314頁

6) 戸田博士。日本の經濟 16頁

りしに非ずして、模倣の中に自ら改造の意を偶し、我國特殊の發展を遂げしものといはなければならぬ。

要するに外國の文明をよく咀嚼し同化し改造して築き上げられたものが、日本の文明であるがこのことは經濟の方面に於ても勿論同様であり、外國文化の影響の著しきことは、日本經濟史に於ても一の特性として數ふべきものである。

七

最後に經濟の様式から考へる。經濟の様式とは如何なる形態の經濟が主として行はれたかといふことであつて、これも觀察の標準によつて、或は産業の形態から考へることも出來、交換消費の關係から見ることでも出來、其他種々の觀察點を定むることが出来るが、こゝには普通に考へらるゝ産業形態からの發達について我國の特徴を捉へて見たいと思ふ。

リストやグロッセの階段説によれば、産業の形態は、大體に於て狩獵牧畜等の狀態から農業に進み更に商工業に發展するものとせられて居る。然らば我國に於ては如何といふに、原始時代には、人々は一般に狩獵漁撈等によつて食料を採取したものであるが、牧畜時代なるものが我國に存せざりしことは一般に認めらるゝ所のものである、且農業も亦極めて早く太古より行はれ、勸農は國の重要な政務の一として考へられたものである。奈良朝以後に於ては農業は我國の基本的の

7) 拙著、經濟史研究、4頁以下、及び經濟史考、2頁以下參照。

産業となり、農は天下の本なりと稱せられ、徳川時代殊にその中葉以後に於ては町人の勢力が次第に興り來りしも、農業は依然として我國の唯一の産業と稱して差支なきものであつた。明治維新後、商工業の發達は殊に著しきものがあり、商工立國の聲頗る高きも、國民の大部分は尙ほ農業に従事しつゝある有様であつて、斯業は依然として我國産業中最も重要なものとなつて居る。

歐米先進國に於ても、嘗ては漁獵牧畜より農業に進み、農業が産業の中心たりし時代も有るが、現在に於ては或は農業衰へて商工業のみ進めるものあり、或は農商工の併立を見るも、その實農業は特に保護を加へて、其自然の衰頽を防げるに止まるものもあり、或は農工商共に存し何れも大に進歩せるも而も商工の發達一層著しき國もあつて、要するに農業時代といふよりは、商工時代といふの適當なるを感ずる次第であるが、我國に於ては上述の如く、實に農に始まつて今猶農に居るの狀態である。これはもとより我國の政治的事情や地理的事情にも據る所である。蓋、我國は大陸から離れて島國として存在し、海外との交通も上古には盛んなりしも、中世に至つて却て退嬰的となり（これ上古に外國文明の影響深くして、中世に至つて稍我國特有の文化を生ずるに至りし所以である）この事情の下に我國は我國にて自給自足の經濟を立つることとなり、從て國民の食料を供給する農業が最も主要なるものとなり、政治的事情より國民の海外發展を阻止せしのみならず、農業それ自身が保守的性質を

有するものなるより、從て自由なる精神を必要とする商業を生み出すの力、極めて乏しく、徳川時代に至つても、その精神は同様であり、時代の經過と共に我國特有の文明を作り出し、明治に及んだものであるが、維新後、歐米と盛んに交通し歐米の文物を受けて、歐米模倣の産業は大に發達せしも、固有産業の一たる農業は、地理的事情其他の原因に制せられて、同様の發達を遂ぐるに至らざると共に、國民が特殊の生活慣習を有するより、今猶國民の大部分が農に従事し、農業は依然として我國の最も重要な産業たる地位を有する次第である。かくの如く我國が農業國として終始せることは、歐米先進國の經濟史に比して一の特徴たることは明かである。

八

日本經濟史には、主要なる觀察點より見て以上三種の特徴あることを認めざるを得ぬ。その特徴のは非善惡を論するは經濟史の範圍外である。而してこの特徴を生ずるに至つた原因については、我國の地理的社會的條件によることが少くないと思ふが、それは他日に譲り、茲には本問に關係して比較研究及び一般的研究に就て少しく附言することを許されたい。

日本經濟史の特性を知るがためには、勢ひ我國の經濟的發達と、外國特に歐米先進國の經濟的發達とを比較し考察するの必要がある。この比較研究については頗る綿密なる注意が必要である。我々は各國經濟史の比較研究によつて、一方に於ては、或る國に特有の事柄であると考へて

居つたことが、他の國にも符節を合するが如く、同様の事例の存することを知ると共に、他方に於ては、時を異にし處を隔つるによつて、両者の變遷が極めて著しく異れることを知るであらう。然るによく鑿索を遂げて見ると、さきに同様であると考へて居たことは、單に外觀上だけのことであつて、その事柄の眞底に横はれる意義より見れば、著しき相違あるに驚くことがあり、又反對に、外觀上異れりと考へし事柄が、その内部の意義からいへば、同様のものであるに心付くことが少くない。故に單に甲國に或る事實があり、乙國にも同様の事例があつたといふことのみより速斷するは、必ずしも正鵠なる觀察を遂ぐる所以ではなく、比較研究に當つては餘程綿密なる注意を拂つて、外觀上の事柄のみならず、その内部の原因、周圍の事情等をも考へ判斷を誤らざる様に心掛けねばならぬ。

余は嘗て比較研究は正確なる特殊研究の基礎の上に築かれなければならぬことを説き「多くの特殊研究から壓搾された概観でなければ、その概観は極めて根據の薄弱なる概観に過ぎぬ。砂上の樓閣では我々は最早満足することが出來ぬ。疾風強震にも動搖せぬだけの精確なる基礎の上に概観を立てなければならぬ。我々は比較研究の必要は大に認むるものであるが、先づ特殊研究から進んで行くことの必要を痛切に感じつゝある次第である」と論じた。然るに未だ多くの特殊研究をも成さざるに拘らず、日本經濟史の特性といふが如き概観を説くは、矛盾せるの甚しきもの

ゝ如くに考へらるゝかもしれぬ。然しながら、翻つて考ふれば、日本經濟史の全般に亘れる知識なくして、直ちに特殊の問題について、細い研究をなすことは、往々にして大局の觀察を誤り、常例と例外との區別を閉却し、その論斷が常に偏倚する虞れあるのみならず、一般に勞多くして功少き結果を來たすを免れない。それ故に先づ第一に、一通りは日本經濟史の一般について研究をなすべきものであつて、然る後に、特殊の問題について研究の歩を進め、最後にまたそれを總括して大體の上から觀察を下すことが必要である。國史の研究が宜しく國史總論に始まつて、また國史總論に終るべき筈のものであると同じく、日本經濟史の研究も、須らく一般的研究に始まつて一般的研究に終るべきものであることを知らなければならぬ。

以上述べし如く比較研究は極めて重要なものであるが、至難のものであり、従つて茲に日本經濟史の特性として論せし事柄の如きも、或は單に外觀に捉へられて、事の真相を得ざるものあり、他日の斧正を要する點もなきに非るべしと雖、從來日本經濟史に關する特殊研究は可なり多く發表せられおるが如きも、總括的研究は、上述の如く重要なに拘らず、あまり多く公表せられず、此問題に關しても纏まりし一の論文として發表せられしものは、極めて乏しきを以て、推敲未だ足らざるも、敢て茲にこの一文を草せし次第である。

9) 内田博士、前掲書、3頁

10) 此問題に就ては佐野學氏「我國經濟生活の特徴」あるのみ(同氏著、日本社會史序論及日本經濟史概論參照)